

報告 鞠智城跡の調査と成果

報告者紹介【東京会場】能登原 孝道（のとはら たかみち）

九州大学大学院卒業。熊本県文化課を経て、現在、

熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園温故創生館」勤務。鞠智城発掘調査に従事。

報告者紹介【大阪会場】矢野 裕介（やの ゆうすけ）

同志社大学文学部卒業。熊本県文化課を経て、現在、

熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園温故創生館」勤務。鞠智城発掘調査に従事。

・報告「鞠智城跡の調査と成果」

矢野 裕介 ・ 能登原 孝道（熊本県教育委員会）

はじめに

皆さん、こんにちは。熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の能登原と申します。私のほうからは本日、鞠智城跡の調査と成果と題しまして報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず鞠智城跡では、昭和四二年から約半世紀にわたりまして、発掘調査を実施してまいりました。その間、平成一六年の二月には、日本の歴史上重要であるということから国の史跡に指定され、また、現在発掘調査の成果を基に、歴史公園の整備を現在進めております。また昨年の三月には、これまでの発掘調査の調査を総括した調査報告書を刊行いたしました。本日はその報告書の成果を含めまして、鞠智城跡の調査と成果についてご報告したいと思います。よろしくお願ひいたします。

一、鞠智城跡の概要

まず鞠智城の概要ですが、鞠智城というのは七世紀後半、今から約一三〇〇年前に、大和朝廷によつて築城さ



写真1 能登原孝道氏（東京会場）

れた古代山城になります。この城が築かれた契機となつたのは、西暦六六三年に朝鮮半島で起こりました白村江の戦い、「はくそんこうのたたかい」とも言いますが、その戦いになります。その戦いの原因となつたのは西暦六六〇年、朝鮮半島の南西部にございました百濟という国が、中国の唐と、それから百濟の東隣にありました新羅によって滅ぼされます。当時日本は、百濟と友好関係にあり百濟を復興するために、日本は朝鮮半島に 出兵をいたします。そして、現在の韓国の西海岸の白村江という場所で、新羅と唐の連合軍と戦うのですが、大敗してしまいます。当時の日本は天皇は、大化の革新で有名な天智天皇です。天智天皇は唐と新羅の連合軍が勝利の勢いに乗じて、日本に攻め込んでくるのではないかということを考えまして、西日本の各地に山城を造つていきます。鞠智城はその時に造られた山城の一つということになります。つまり鞠智城は、古代日本の防衛体制の一翼を担つた城であることが言えるかと思います。また鞠智城は七世紀後半に造られまして、一〇世紀中ごろまでの約三〇〇年間存続した城で、古代山城の中でもかなり長期間使われた城になります。その間の変遷は五期に分けられることが明らかになりましたが、それについてはあとからまた詳しくご説明をいたしたいと思います。

こちらは古代山城の分布になります。白村江の戦いで敗戦のあと、西日本各地に山城が造られるのですが、それは唐と新羅の連合軍が攻めてくると想定されるルート、つまり最前線の対馬、そして北部九州、それから瀬戸内海沿岸から近畿にかけての地域に

造られます。現在までのところ、全部で二二一の城が確認されておりますが、その中でも鞠智城は、一番南に位置している城になります。

つづきまして、鞠智城跡の位置ですが、鞠智城跡は熊本県の北部に位置しております。熊本県に阿蘇山という山がございます。阿蘇の外輪山から有明海に向けて流れる菊池川という大きな川があり、鞠智城はその菊池川の河口から内陸に約四〇キロ遡った地点にございまして、現在の山鹿市と菊池市にまたがって存在しております。ところで、古代の九州の中心は、大宰府という場所でした。

これは現在の福岡県の太宰府市にあつたもので、そこから鞠智城は南に直線距離で約六三キロ離れております。また熊本県は古代においては肥後国と呼ばれておりましたが、肥後国を中心、国府があつた熊本市周辺部からは北に約三〇キロ離れた場所に位置しております。

こちらが鞠智城跡を南東方向から撮影した航空写真です。赤の線で示した範囲が鞠智城の城の範囲になります。ここは標高約一四〇メートルの、通称米原台地よなばると呼ばれます台地上にこの城は位置しております。鞠智城以外の山城が、標高四〇〇メートル以上の高い所に造られているのに比べて、この鞠智城は山城といいながらも、かなり低い場所に築かれているのがその立地の特徴として挙げることができます。

また、鞠智城のことは古い文献や歴史書にも残されております。奈良時代から平安時代にかけて国の歴史を記しました六つの国史、国の歴史書がございます。いわゆる「六国史」と呼ばれるものです。その最も古いのが『日本書紀』になりますが、日本書紀の次に編纂されました、『続日本紀しょくにほんぎ』というものに鞠智城の名前が出てまいり



写真2 矢野裕介氏(大阪会場)

ます。どのように出てくるかと申しますと、大宰府に、大野城、基肄城、鞠智城の三つの城を修理させたという記事になります。これが、鞠智城が文献に出てくる最初の記事になります。残念ながら、鞠智城が築城されたという記事は残されておりません。その後九世紀、平安時代になつてからですが『日本文德天皇実錄』、そして『日本三代実錄』という歴史書にも、鞠智城のことが出てまいります。この時は、菊池城院、または菊池郡城院という名前で出てきます。その内容としましては、鞠智城にありました武器庫に保管してあつた鼓が勝手に鳴つたという奇怪な現象や、あるいは鞠智城の中にあつた不動倉、これは米倉のことですが、その米倉が二一棟火事で焼けた、という記事が残されております。その後、西暦八七九年の『日本三代実錄』の記事を最後に、鞠智城のことは文献からは消えてしまいます。ですので、鞠智城の修理から、その八七九年までの約一八一年間は鞠智城が存在したということが、文献から知ることができます。

つづきまして、こちらは鞠智城の平面図になります。太い線の、赤い線、青い線、黒い線で囲つた範囲が、鞠智城の範囲になります。城内の面積が、約五五ヘクタール、これは東京ドーム約一二個分の広さで、かなり広い面積になります。周囲の長さは、約三・五キロメートルです。そして冒頭にも述べましたとおり、昭和四二年から、三二次にわたり発掘調査を熊本県で実施してまいりました。その結果、城の中心部、台地の平坦部に当たる場所、この場所から合計で七二棟の建物跡が見つかりました。また、城の南側からは、三ヶ所の城門跡が見つかっております。これは東から、深迫門、堀切門、池ノ

尾門と呼んでおります。また、城内の北側の谷部には、貯水池跡が見つかっております。この場所になりますが、現在は完全に池は埋もれていたのですが、発掘調査の結果、ここに約五三〇〇平米の池があつたことが分かりました。発掘調査では、土器や瓦、木製品、そして木簡や、百濟系銅造菩薩立像といった貴重な遺物が出土いたしました。

二、鞠智城跡の内部構造

こちらは平成九年度に撮影いたしました長者原地区の航空写真で、この地区は最も建物跡が集中して見つかった地区になります。白い点々で見えるのは、建物跡の柱の跡です。鞠智城から検出された建物は掘立柱建物と礎石建物の二種類がございました。掘立柱建物というのは、穴を掘つて、そこに柱をそのまま立てるタイプの建物で、礎石建物というのは、柱の下に大きな石を敷くタイプの建物です。掘立柱建物から礎石建物に変遷していったことが、鞠智城の調査からも分かつております。

そういうつた建物がある中で、大変特徴的な建物というのが、赤い丸で示しております、平面八角形を呈する建物跡になります。これは南北二棟分が見つかっております。また、その北側からは、片仮名のコの字形に配置されましの建物群が見つかっております。こういったコの字形配置の建物は、古代の役所などに多く見られるものでして、おそらく鞠智城のこの場所にも、城の運営や管理をつかさどつた中枢施設があつたものと考えられます。そして、この長者原地区の台地を下りて行った所には、貯水池の跡が存在しております。

つづきまして、これは建物跡を近くから撮影した写真になります。上の左側の写真が、南北二棟見つかった八角形建物のうち、南側から見つかった建物です。真ん中に大きな心柱がございまして、その周りを柱が八角形状に、また三重にめぐってあります。上の右側の写真は北側から見つかった八角形建物でして、これも同じく真ん中に心柱がございます。その周りを八角形状に柱がめぐっておりますが、南側が三重に柱がめぐるのに対し、北側は二重にめぐっているという違いがございます。また下の写真は四九号建物跡と呼んでいます礎石建物跡で、こちらは縦横の長さが二一・六メートル×一・七メートルという、鞠智城の中でも最大規模の礎石建物跡になります。

つづきまして、城門の説明に移らせていただきます。これは城の最も西側から見つかりました、池ノ尾門跡の写真になります。両側から尾根が迫っており、尾根に挟まれた谷部に門が造られております。谷部を遮るように石墨が造られておりました。残念ながら、一部を残してほとんど崩壊していたのですが、この石墨の下からは、通水溝が見つかっております。通水溝というのは、城内の水を城外に流すための暗渠状の溝になります。また、この調査区の中からは門の跡は見つかりませんでしたので、おそらく画面の右側、現在道路が通っている所に、古代の門、城門があつたのではないかと考えております。

つづきまして、写真の左側は堀切門跡の調査中の写真になります。これは三つある城門のうちの真ん中に位置しております。奥に見えておりますのが、門礎石と言いまして、門の下に敷いていた、石になります。これは一つの石に二つの軸摺穴じくずりあな、軸摺穴というのは扉の軸を入れ込むための穴で、それが二つ彫り込まれている大変珍し

い形式のものです。また堀切門跡からは、城の外から中に入る側溝を持つ道路の跡が見つかっております。また右側が、深迫門跡、最も城の東側から見つかった門で、ここからも門の礎石のほか、門の両側に広がる土星の跡が見つかっております。

つづきまして、これは貯水池跡の写真になります。左側は貯水池跡の池尻部を調査している時に撮影した写真になります。左右の両側に尾根がございまして、その真ん中の低い部分、もう現在では埋まっていますが、ここは全て貯水池があつた場所になります。右側の写真は調査中に撮影した写真で、柱などの建築用材の出土状況の写真になります。貯水池跡というのは、飲料用の水ももちろん溜めていましたが、それ以外にもこういった建築用材などを保管する貯木場としての役割があつたことも分かっております。

つづきまして、こちらは土壘の写真になります。鞠智城は周囲三・五キロメートルですけれども、そのうち、西側と南側から土壘線が明確に確認されております。土壘というのは、ほかの古代山城にも見られるように、版築はんせき土壘どるいという土壘が造られております。これは性質の違う土や砂を交互に突き固めていきまして、強固な城壁にしましたのです。右側の西側土壘線の写真を見ますと、土壘の一一番下に石を並べまして、その上に土を盛っている状況が分かるかと思ひます。

三、鞠智城跡の出土遺物

つづきまして、鞠智城跡から出土いたしました遺物について紹介、説明したいと思ひます。鞠智城跡から最も

多く出土しているのが、土器になります。土器とはお皿などの器のことです。左の写真は、須恵器と呼ばれます。高温で焼かれた土器になります。右側の赤茶色っぽい土器は、土師器と言いまして、須恵器よりも低温で焼かれた素焼きの焼物になります。こういった土器の形態的な特徴から、例えばその土器が出土しました建物跡などの時期、年代が分かつてまいりますので、土器は大変重要な遺物になつてまいります。

つづきまして、これは木製品の写真になります。これは貯水池跡から出土しました。貯水池跡では、柱などの建築用材も保管していたのですが、それ以外にこの写真のような平鉗や横槌といったものも見つかっております。つづきまして、これは貯水池跡から出土しました木簡になります。木簡とは、細長い板に墨で文字を書いたもので、この木簡には、上から「秦人忍口五斗」という文字が書かれておりました。解説できなかつた四文字目に、おそらく米という文字が入るだろうと考えております。秦人忍という人が、米を五斗、鞠智城に納めましたと「う」とが書かれていると解釈されています。

つづきましてこれは瓦になります。この瓦は建物の軒先を飾る、軒丸瓦と呼ばれるもので、蓮の花の模様がデザインされています。

つづきまして、これは平成二〇年に貯水池跡から出土しました百濟系の銅造菩薩立像になります。写真ですと少し大きく見えますが、実際は高さ一二・七センチ、幅三センチの小型の仏像になります。これは形態的な特徴から、七世紀後半に朝鮮半島の百濟で造られたものと考えられております。

四、鞠智城の変遷

次に鞠智城の変遷に移ります。これは冒頭に述べました、昨年三月に作成しました調査報告書の中で明らかになつてきましたことになります。鞠智城は七世紀後半から一〇世紀中頃まで三〇〇年間変遷したと分かつておりますが、その中で五つの時期に分かれるということが明らかになりました。そのうち最初の時期が、鞠智城Ⅰ期になります。これが七世紀第3四半期から第4四半期。四半期というのは、一〇〇年を四分割したものになりますので、七世紀第3四半期は、西暦六五〇年から六七五年の時期になります。この時期は鞠智城の創建期として、掘立柱建物が造られます。また城門、貯水池、土塁も造られます。この時期は、古代山城としての最低限の機能が備わった時期だと考えられております。

つづきまして、鞠智城Ⅱ期になりますけれども、この時期には八角形の建物が出てきます。また、またこの字形配置の建物群も出現します。内部施設の充実化が図られた時期であると考えております。また、『続日本紀』に記載されました鞠智城の修理の時期も六九八年とありますので、この鞠智城のⅡ期に該当すると考えられます。

また鞠智城Ⅲ期は、礎石建物が出現してくる時期になります。ただし、城内から土器が全く出土しませんので、城の活動は停滞していたものと考えられます。

つづきまして、鞠智城Ⅳ期は、礎石建物が大型化する時期になります。また、倉庫と考えられる建物が多いことから、食糧備蓄施設としての機能を持っていたと考えております。

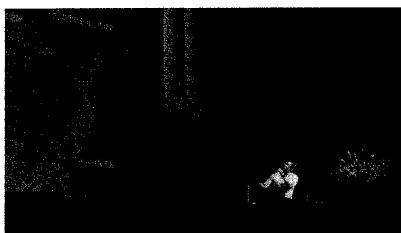


写真3 矢野裕介氏(大阪会場)

ます。

そして、鞠智城の終末期にあたる鞠智城Ⅴ期は、建物の数が減少しますが、新たに大型の礎石建物が建てられていることから、倉庫としての機能が主体的に維持されたと考えられております。

終わりに

このような発掘調査成果を基にして、鞠智城ではこれまで歴史公園としての整備を進めてまいりました。これまでに合わせて四棟の建物跡を復元整備しております。左側の写真は、南側の八角形建物跡を復元しました、八角形鼓楼になります。右側は、上から米倉、兵舎、板倉といった建物を城内に復元しております。また、城内には、ガイダンス施設としまして、温故創生館を設置しております。その中では、鞠智城の歴史や変遷について分かりやすく説明したパネル、また実際に鞠智城から出土しました土器や瓦、また木製品といった遺物も多数展示しております。まだ鞠智城に来られたことがないという方は、是非一度、鞠智城に来ていただきたいと思います。少し駆け足になりましたが、以上で私の報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。